

あれからもう半世紀になろうとしており、今、当時の記憶をたどりながらつたない文を綴っておりますが、あの異国の地に眠る犠牲者の皆様は、一口に言えば餓死同然だと私は思います。あの寒さ、重労働も、十分食糧があつたなら耐えることができたと思います。私も復員後、抑留中のことを思い起こす暇もなく懸命に頑張ってきましたが、あの不法な抑留がなかったなら、倒れた戦友たちも私たちと同じように、今、孫たちに囲まれて幸せな時代を過ごすことができているはずなのにと、ただただ残念至極に思い、御魂安かれと祈るのみです。

シベリア抑留記

大阪府 竹内 六次郎

私は、大正十二年八月十六日に、大阪市北区菅栄町五八番地において、竹内幸次郎の六男として生まれました。現在の菅北小学校である大阪市立済美第六尋常

高等小学校の高等科を卒業後、稼業の米穀店を手伝っておりましたが、昭和十九年二月十五日に現役兵として満州吉林省林口山の山砲第八七一部隊に入隊、翌二十年四月に同隊の永安派遣隊に転属になりましたが、八月十六日には海林において武装解除を受けました。たまたまそのころにこの地の火薬庫が爆発する事故があり、その爆風により大火傷を負い、その地において火傷の治療を受けましたが、ソ連軍の支配下にて医薬品もなく、背中には「ウジ」がわいていると衛生兵が言うておりました。

ここではテント生活をしながら治療を受けており、十二月になると、そのまま我々三百人の負傷者と他に二百人とで五百名単位の混成大隊を組み、第一チタ地区に入ソいたしました。服装は夏の軍衣袴、編上靴で、帯革はしておりましたが、革の帯革はソ連兵にとられたりした者もありました。この服装で零下何十度の地で作業を行ったわけでございます。

チタは旧満州国境からも近く、支給される食糧は余り悪くもなく、僻地における戦友のように「ヒドイ」

状態ではなかったと、今にして思えばそのように感じられます。この第一チタ地区にては五階建てのビルを建築したわけですが、二年を要するといふところを二カ月早く完成しましたので、私たちには一人十五ルーブルが支給されました。作業は日曜は休業となりましたが、時々夜間に石炭の下ろしなどの使役に引き出されることはありません。

またここでは、戦車の格納庫をつくるのに、長さ約二十メートル、径三十センチの木材をタポール（斧）で十八センチ角にはつらされたこともありましたが、「よく働いてくれた、トウキョウダモイ」ということで、次に移ったのは第二チタ地区で、ここではほとんど煉瓦工場での作業でした。

前に述べたとおり着のままでしたから、服はボロボロになり、やっと綿入れの満服が支給され、ほっとしたことが思い出されます。シラミとは長い付き合いでしたが、二十二年ごろから彼らとは縁が切れたように思います。

前のところでは報奨金をもらいましたが、その金で

現地人と一緒に並んでパンを買っている際に、私は遠慮してソ連人に順を譲ろうとすると、販売人がキツパリとそれはだめだ、遠慮することはないと言ってくれましたが、その点には感心したこともあります。一般的にソ連人は人のよいのが多く、私たちにも平等につき合ってくれたように思います。シベリアには「スターリン」に背を向けた者が多く、同病相憐れむ境遇にあった者が少なくなかったようです。

二十三年九月末ごろ「チタ」を出発、ナホトカの集結収容所に一カ月ほどいて、十月二十三日の信洋丸にて舞鶴港に上陸復員いたしました。その後は家事の手伝いをしておりまして、二十四年には脊椎カリエスの治療を受けたりしましたが、やっと二十五年に住友銀行に就職することができ、定年まで勤務しました。しかし、その間、昭和四十年には一年六カ月肺結核にて入院するなど、シベリアのお土産はいつまでもつきまとい、本年（平成六年）には肺気胸にて入院しておりました。

抑留の生活を忘れようとしても、このように体のほ

うが思い出させてくれます。戦後処理も来年をメドに行われるようですが、我々六十万余りの者が戦後において抑留され、強制労働を強いられ、一割の戦友が彼の地で亡くなったことは永久に記録されるべきだと思います。私は通常一人でいるとき、「異国の丘」を口ずさみ、また「岸壁の母」の歌を聞くにつけ涙がとまらず、六人兄弟のうち私が一番帰国がおくれたため、今は亡き父母の想いを考えるとたまらない気持ちになります。子を持つ親となった者の心情でしょうか。永久に平和が続くことを祈るばかりです。

思　　い　　出

高知県　廣　瀬　健　市

私が北陵に収容されたのは八月二十二日前後だったと思います。私たち第六三師団は、元北京防衛師団で、八路军相手に小競り合いを繰り返しておりました。私の所属する野戦病院は、第六三師団編成時に北京防衛

旅団を師団編成するときの要員として、第三五師団Ⅱ開封郷一帯Ⅱ黄河北岸に布陣Ⅱの第二野戦病院でした。昭和十八年四月、五月の、十八年春新太行作戦に出動、八路军を叩いた後、六月、第六三師団に転属、北京周辺の保定に野戦病院は開設されました。そして第六三師団特別訓練隊に勤務派遣を命ぜられ、八路军と常ににらみ合いながら勤務し、昭和二十年六月、満州北西部の通遼に陣地を構え、友軍三個師団と共に、敵九個師団と対峙^{たいじ}しておりました。

八月開戦と同時に、敵の侵攻を防ぎつつ奉天に後退、最後の決戦を行うつもりだったところ、八月十五日終戦、数日後、北陵収容所に入り武装解除になりました。昭和二十年十一月七日ごろに、私は労働大隊要員として原隊に別れ、第五五労働大隊（第五九労働大隊であつたかもしれません）と共に行動したのです。このときの編成は千五百名として、軍医は五百名につき一名ということで計三名が付きました。約二週間の貨車輸送の後、ハラゲンに下車しました。この千五百名の大隊のうち、到着の夜、千名は私たち五百名よりずっと奥